みなと 今・むかし新聞

第 11 号

平成21年10月

母なる川！ 古川の源流を訪ねる！

港区は、武蔵野台地の東に位置しております。青山台地・赤坂台地・麻布台地・飯倉台地・白金台地及び高輪台地がある一方で、台地と台地の間に谷地があります。そのため、「坂」が多いのです。その谷地に流れるのが「川」です。

港区にも、こんなに「川」がありました

港区には、川がいくつもありました。「古川」を筆頭に「汐留川」・「桜川」・「宇田川」・「入間川」及び「笄川」等です。でも、現在は、埋め立てられてしまった川がある中で、古川のみが地表から見られます。

古川は、二里半（概ね１０キロ）の長さを持つ川です。しかも、港区と渋谷区・新宿区の３区にわたり流れています。水源は、新宿御苑で、かつて高遠藩内藤家の屋敷地でした。ここから、原宿をとおり渋谷駅近くに達します。ここで、東に向きを変えまして、天現寺に向かいます。ここで暗渠であります「笄川」と合流します。水路は、さらに「狸橋」「五の橋」「四の橋」「新古川橋」「古川橋」と続き、北へ向きをかえて、「三の橋」「二の橋」「一の橋」と流れていきます。一の橋からは、進路を東に取り「新堀橋」「中の橋」「赤羽橋」「芝園橋」「将監橋」「金杉橋」と通過して、江戸湾へと注ぎます。

ひとつの川にこんなに多くの名前が

「古川」は、通過する地域ごとに川の名前があります。天現寺から新宿御苑あたりが「渋谷川」といわれてます。

天現寺から一の橋あたりが「新堀川」、残りが「金杉川」という名称で地域の人々から親しみをこめて名付けられてきました。

「金杉橋」は、江戸湾からの最初の橋で、東海道の南北をつなげる重要な機能を持っておりました。江戸時代、大勢の方々が渡って行ったのでしょう。此のそばには、江戸庶民の娯楽でした歌舞伎公演場所として「河原崎座」がありました。でも、公演期間は、明治七年から一八年という短期間でした。

「赤羽橋」は、増上寺の西側で、近くには「赤羽接遇所」や「久留米藩有馬屋敷」を抱えた地域。荷揚げ地としても利用され、「河岸」がありました。ここの橋は、地域住民の物流地点としての役割を担っていたのでしょう。その痕跡として、橋の近くに「馬頭観音」の石碑があります。

「一の橋」は、麻布十番の要衝の地にあります橋です。「大江戸線」「南北線」が交差する場所。かつては、「馬場」があり、馬の売買や、武士の乗馬訓練等が行われていたことでしょう。ただ、この馬場は、享保年間に、西応寺付近にありましたのが移転してきたのです。理由はひとつ。五代将軍徳川綱吉の養女・竹姫がお輿入れする際に「建物」の建設地として利用するためでした。

なお、「一の橋」の東側に石碑があります。そこには、橋の由来が書かれてます。『一之橋は、元禄十二年（一六九九）八月始めに架けられ命名。（略）――一之橋は十番商店街を控え、古くから交通の要所であった。今日も都心南部での著名な橋の一つである』と。

一の橋から麻布十番に入り、著名な「善福寺」にお参りしたり、映画を楽しんだり、十番倶楽部で落語等を楽しんだりと、楽しい日々を過ごしたとお年寄りから聞かされたことがありました。

「四の橋」は、高輪方面から麻布に来る人は、この橋を渡ったそうです。麻布側には、江戸幕府になって寛永七年（一六三〇）に幕府の「薬草栽培所」が設置されました。そのため、この橋は「御薬園橋」と言われた時もありました。その後、御薬園は五代将軍・徳川綱吉の別荘地として利用されることとなり、この御薬園は、文京区の方に移転しました。

元禄十二年（一六九九）に別荘地の建設にあたり、古川の改修工事が行われました。その時、「一之橋」から四番目なので、橋の名前を「四之橋」としたそうです。

また、この橋の西北に「土浦藩主・相模守」の下屋敷がありましたので「相模橋」と言われた時期もあったそうです。

「天現寺橋」は、港区と渋谷区の区境です。古川には、外苑西通りに流れていた「笄川」がここに流れ込んでおります。今は、暗渠となっておりますので、見ることはできません。

様々な地域を流れながら、江戸湾に注がれております「古川」。地域の人々に古くから愛され親しまれてきたこの川を大切にしたいものです。

（清田和美）

区内あちらこちら

東新橋あたり

貨物駅だった汐留を、カタカナ名前の、「シオサイト」が似合う街に生まれ変わらせた流れは、線路を挟んだ向かい側にも及んでいる。

そこは荷物の取り扱いをする運送会社や鉄道郵便局が仕事をしていた場所だったが、いまその跡地には馬券売場、ホテル、小じんまりで個性的だが全体の意匠が揃えてあるのだろう異国風なシャレたビルが建ち並んでいる。

イタリア街と言うそうだ。

店先にテーブルを置いた開放的な飲食店など珍らしく、見て歩きにはもってこいだが、この一劃の道も注目に値する。

レンガ色の石を１０センチ角に割って波形に敷き並べた車道と、わざと荒削りに仕上げた長方形の石を組み合わせてある歩道なのだが、周囲の壁の明るい色調とともにこの街の景色に欠かせないものだ。

歩くとデコボコした感触が足裏に当って心地よい。

そもそも、最近は足が弱り、転ぶのを警戒して下を向いて歩くから、見逃すものが多いのだが、そのかわり足元の色も形も材質も様々な敷石が描き出す模様の面白さに気がついて儲かった気分である。

イタリア街では雨に降られた。濡れた石畳が一際鮮やかに引き立って美しかった。

街歩きは愉しである。（文・武恒雄　写真・井上繁）

港区地域の今に至るまでの歴史
― 遥か昔ここは海の底だった ―

かって港区は東京湾の深い海底に存在していたと、ある学者の本に記されていたのを、偶然、図書館で見付け大変興味深く読んだ記憶があります。東京湾から流入した太平洋の海水が、秩父山塊群の奥にまで到り、多くの入り江や半島や島などを形成して、関東地方は鱶や鮫のような大魚が自由に遊泳する海だったと書かれています。今、近代化された高層マンションに住み、便利な電化生活に囲まれ、昼夜を取り違えたナイター好みの若者には（芝区、麻布区、赤坂区の三区が合体した）港区が昔は海の底だったと言う事実を伝えると、誰もが「ウッソー」と言って、容易には信じられないのも当然、今昔の生活の格差が余りにも大き過ぎて、若者には到底理解できないものがあるかも知れません。でも有り難いことに、関東地方各地の歴史館、博物館、文化資料館などで、古代魚の化石の展示物や貝塚跡地の膨大な貝殻の生活遺品や、釣り船、釣り針、釣り糸などの漁具の品々が数多く展示されていて、かっての東京が海だった事実を、いとも簡単に私達に証明して見せてくれています。

さて、時代を遡り今より百五十年ほど前の明治の初期の頃の事を考えてみますと、東京湾はすでに現在のような形ができあがっていました。芝の愛宕神社や伊皿子坂の頂上では海岸に打ち寄せてくる白波や、あまり砂量の豊かでない痩せた東京の砂浜や、海岸線を蛇行して西に向かう東海道の松並木が眼下に眺められ、天気の良い日には、木の間隠れに、あの鉄道唱歌にある房総半島が紫に霞んで見られたと、土地に住む先代達から聞いたこともありました。古川が東京湾に流れ込む河口、今の金杉橋付近は、海と川の入り混じった豊かなミネラルを含んだプランクトンが多かったと見えて海苔の生産には最適地、芝浦の海苔は江戸の名産品（浅草海苔）として、明治期には盛んに生産され長く名声を馳せたのでした。しかし、大正期、昭和期と、一の橋、二の橋、三の橋、古川橋、四の橋付近に新しい機械工業の町工場が台頭し、それぞれが急速に発展するや、古川の清流が悪臭の濁流と代わり、海苔の品質の変質と海岸埋め立ての問題が絡んで、いつか金杉橋の海苔屋さん達も自然に衰退してしまいました。浜松町駅から田町駅にかけて、今、新幹線が超高速で疾走している鉄道線路沿いの一帯が、多数の海苔屋さんが生産に従事していた場所のようです。本当に時代の移り変わりは激しく、そして淋しく悲しく、何とも残念な出来事でした。

魚らん坂の中程に可愛い赤い帽子をかぶった六体のお地蔵さんの並ぶ魚らん観音の寺があります。赤い山門を入り観音堂の本堂に参詣し願掛けする人が多く、大変人気があり、願いの叶った人達がお礼に奉納したものは塩でした。ビニール袋に入った一キロ詰めの塩袋がお地蔵様の背丈ほどに積み上げられていて、下積みの袋から地面に溢れ出した塩も大量で、誰もがビックリさせられます。この地も潮の満ち干に関係のあった海岸線とか。

何故東京湾が海岸をだんだんに後退させてしまったかの原因は、何千年もの間、毎年数センチにわたる太平洋沿岸の土地の隆起と、江戸、明治、大正、昭和、平成と連続して埋め立て工事を続行した結果にあったようです。お台場を埋め立てた膨大な岩石や土砂にしても、黒船来航に慌てふためいた江戸幕府が、先ず手近な場所から品川の八ッ山、泉岳寺、高輪付近の山や崖を無暗に切り崩し、時には墓石、庭石までもが、手早く船で運ばれたものだと言われています。埋め立ての功罪は色々ありますが、埋め立てを通して、現在のお台場地区では、考えてもみなかった遠方同士の港区と江東区が、手を握り合える近い隣人になれた事と、東京湾岸道路による東京と千葉を結ぶ東西交通の便利さを、第一に功罪の功とするならば、芝浦の海苔養殖の衰退は、先ず功罪の罪の一番手に挙げられるのではないでしょうか。

（青木）

昭和二十年三月十日　東京大空襲
「義母よりの聞き取り」

昭和二十年三月十日の際、聞けば夫の家では劇的なことがありました。

日本橋北新堀町の家では三月九日に田舎に発送すべく大きな物はピアノを始め全て梱包を終え、明十日午前六時に汐留の日通から引き取りに来ることになっておりました。義父は町会の役員をやっていた関係上、私情に構っておられず十日早朝空襲警報発令と同時に飛び出して行ったそうです。その時玄関にあった荷物を防空壕に放り込んだのです。それが何と三月お節句の御雛様でした。焼け残ったのは只それだけ、それ以外は全て家を含め灰と化しました。

一方義母は火の粉を避け、十三才の長女と五才の三男の子の手を引き二才の四男をおぶり、永代橋際の東新倉庫の脇から伝馬船に乗り移り、大川（隅田川）へ避難しました。義母は三十五才でした。（因みに義母は関東大震災の時も同じ場所で十三才でした）　当時は風が対岸の深川（江東区）寄りに吹いており、火がそえ盛るそちらの岸壁へと船が吹き寄せられて行ったようです。何隻もの伝馬船が火の粉を浴びて燃え始め、我慢出来なくなった多くの人が川に飛び込みました。義母も子供達を抱き締めてただひたすら南無阿弥陀仏・・南無阿弥陀仏と唱えていたそうです。乗って来た船にも火が移りだし何人もの人が大川に飛び込み、『もうだめだ・・』と義母は覚悟したと言います。その時突然船が引っ張られるようになったので、見ると蒸気船が二、三隻燃え残った伝馬船を川上の清洲橋へと引っ張って行ってくれたと云うのです。ああ・・これで命が助かった・・と思い、岸へ上がった途端、急に力が抜け、崩れるように座り込んだと言います。

子供達に急かされ立ち上がり、自宅のある北新堀町に向け歩きだしました。

ようやく、たどり着いた時、焼け落ちた家の前で一人茫然と立ちすくむ義父の姿がありました。子供達は一目散に駆け寄り、父も諦めかけていた家族を目の前にし、嬉しい再会でした。

一方、長男（十二歳）と次男（十歳）は岐阜の叔母の家に縁故疎開していましたが、岐阜も段々に危くなり滋賀の義父の実家に二人は移動しました。

その二か月後の中部・東海地方の大空襲で二人を世話してくれた叔母が焼夷弾を受け亡くなりました。

関東大震災、東京大空襲と大変な苦労を重ねた義母も、夫を亡くした後、半世紀以上子供の為に生き抜き、今年（平成二十一年）一月、白寿（満九十九歳）を迎えたところで旅立ちました。

＊「東新倉庫」戦時中の偽装名・・三井倉庫（現ＩＢＭ）

「伝馬船」　他の船に引かれて荷物を運ぶ木造船・・はしけ

「蒸気船」　引き船・・タグボート

（宇和島常子）

編集後記

港区は、台地と低地が上手に組み合わさって出来た地域です。今回は低地を流れる「川」を取り上げました。

昔から「大地の母」といわれてます「川」は、私たちの命を守る大切な資源です。しかも、人々も親しんでまいりました。区内を流れる唯一の川「古川」を調べ、その古川の源流そして川に架かる橋を訪ねる旅の一端をご紹介いたしました。

不明の点もありますので、お教えいただければ幸いです。

生涯学習センターでは、語り部の学習会を二階の「さくらだ記念室」で毎月、第二・第四水曜日の午後二時から開催しております。生まれ育った港区の話をお聞かせ下さい。関心ある方々の参加をお待ちしております。

問い合わせ　０３・３４３１・１６０６
発　行　平成二十一年十月一日
港区立生涯学習センター